109 勝５敗の株式投資

・・・・パソコン活用で負け知らず・・・・

Soft House JUMP 島﨑正美

このドキュメントは PC ユーザーズ連盟が発刊した「元気の出る PC 通信」発行：EI 企画、発売：井上書店、1986年）に寄稿した表題文書を2005年6月時点で加筆改稿し、さらに東証上場銘柄が大幅に区分変更されて「成長株2020」へと改訂した2020年4月に記述変更追記したものです。

あなたのマシンはお元気ですか？ どんどん有効に活用していますか？
これからの私の話は、はっきり言ってパソコンを駆使しての金儲けの話でして、まちがいなくあなたをモリモリと元気の出る状態に導き、マシンにも一層の活気をよみがえらせることを保証します。私は本稿に関する限り決してウソは申しません。ハッタリもありません。事実だけにもとづいて話をすすめます。名づけて 「どシロウトの株式投資管理システム開発ドキュメント」。

株式投資にパソコンは本当に役に立つのか？

答えはイエス。とても役に立ちます。もちろん、そのためには良いソフトが必要です。それも、かゆいところに手が届くような気配りのあるソフトが望まれます。

タイトルに示した勝敗は、これまでの私自身の実際の株式投資成績です。日本経済新聞株式欄の全銘柄について売買したことのある銘柄すべてにマークをつけて集計した結果が109 勝５敗と出ました。勝率にすれば実に 96%です。しかも、この中の５敗は株式投資を始めた初期の段階で、十分調べもしないでつい衝動買いをしたものが４、慣れてきたころに欲が出て高値圏と知りつつさらに勝手に株価上昇をきめこんで、いわゆる飛び乗りをして失敗したのが１です。

つまり、当初は高確率で負け続けたわけです。これではいけないと、以降は書籍でじっくり正論を勉強し、負けない投資方法があることを実践して現在に至っています。正論と言い切れるキラリと光る内容のある著書は決して多くありません。いや、むしろ非常に少ないといった方が正しいでしょう。自分が専門家でないだけにかえって本当に役に立った本や、その著者がしぼり込まれましたが、それらは最後にまとめて参考文献として示すことにして、株式投資へのパソコン活用に話をすすめましょう。

価格と機能がマッチしない市販ソフトに憤りを覚え、自力開発をめざす

私は1983 年の正月に 「株式投資に活用する」 というはっきりとした目的をもって NEC PC-8801 を導入しました。

というと聞こえはいいのですが、実はソフト開発プログラミング言語であるBASICは何もわからず、ただ、むかしFORTRANで化学反応の解析プログラムを組んだことがあるので何とかなるだろう、くらいの心がまえだったわけで、適度の容量のプログラム例がたくさん記載されている「はるみのゲーム集」という本を求め、かたっぱしからプログラムを打ち込んではやたらと多いバグさがしにあけくれて正月休みは終わってしまいました。
本題から離れますが、このパソコン導入初期に自分自身で思い返しても「よくぞあんなことができたものだ」と驚くエピソードを紹介しましょう。

いろんなゲームのプログラムの打ち込みに飽きて「バイオリズムによる相性診断」という、できあがりに大きな楽しみを期待させるプログラム入力に集中し始めたのですが、その矢先にディスプレイが突然故障したのです。せっかく気分が乗っているときに作業を中断するのが癪でした。そこでやったのが、ディスプレイ表示なしのままでひたすらキーボードを打つプログラムの入力です。記録のカセットテープはただ「ピロロピロピロ」という信号音しか発しなく、キータッチのミスを犯していようと確認のすべがないままにどんどん打ち込んでいきました。当時にしては膨大な量のBASICプログラムです。すべての闇打ち入力を終えたあとでやっとディスプレイがもどってきて、そのソフトを作動させたとき、なんと相性診断ソフトが正常に動いたではありませんか。リストを印刷すると「ピロロピロピロ」という信号音が、コンマや英字記号を詳細に区別して取り込んでいて、それらがこと細かく印字されてくるなど、まったく信じがたい世界に驚きの連続でした。

話をもどして。そのころ、巷にはパソコンで株式の解析をするという文献はきわめて少なく『PC-8000 シリーズ パソコンプログラミング 500 題』という田中氏による著書の 207 ページに、株価ロウソク足の描き方という例題があって、この部分を解析したい一念！ ただそれだけでこの本を買いました（はやい話、立ち読みで全部を理解するほどの力すらなかったわけです）。この本の例題はわずか２ページの簡単なものでしたが、その内容は実に濃いものでした。株価は一日の立合いで、始値、高値、安値、終値、という４本値を形成し、あと売り買いの出来高が加わって一つのデータ群：レコードを形成します。田中氏は、その短い例題の中に、これら株価データの処理方法を巧みに凝縮して示してくれました。ファイルという概念が必要なこともこのときに知りました。
やがてケンソフト社（1983 年当時、定価 19 万）の「株価分析プログラム」を動かす機会に恵まれました。ところが、マニュアルと首っぴきでもなかなか目的の銘柄解析に到達できません。やっとチャートの表示にたどりついた結果が、めちゃくちゃ遅い表示スピードでおよそ使う気になりませんでした。ソフトのプログラムリストをのぞいてもチンプンカンプン、 私には何一つ参考にできるアルゴリズムをそこに見出すことはできませんでした。
その後、大阪日本橋でアイ企画の「株式解析」というソフトの店頭デモを見ましたが、これはなかなかのものでした。しかしその販売価はとてもわれわれサラリーマンの手に届くものではありません。「りっちなかぶぬし」とか「金のなる木」とかも出てきましたが、どれも高価なものばかりです。確かに、株式投資を本格的にやっている人にとっては 10-20 数万の出費はそんなに大きいものではないかも知れません。

それにしても、そもそもパソコンのソフト全般に高価なものが多いなかで、ことさら株式投資関連のソフトが特に割高に設定されているように思えてなりません。しかもそうした価格に見合うだけの十分な機能が備わっているとも思えないのです。

そこで私は決心しました。私のようなサラリーマンにも手が出せる値段で、機能面でもどこにも負けないソフトを自力で作ろうと・・・。

何よりも強いのは、自分自身が実際の投資に真に活用できるものを目指せばよいということでした。以降に、私がこの決意をいかにして実現に向けて進めたかについて詳しく話したいと思います。

賞金 10 万円をけって著作権を守る

最初にできあがったシステムは、今でこそ恥ずかしい話ですが先に少し紹介したカセットテープ版でした。株価データはDATA文として設定し、データの更新は毎回このDATA文をリストとして画面に出して書き換えるという代物だったのです。

それでも、まだだれも試みていなかった工夫がありました。画面を左右縦に 2 分割して別個にクリアができる簡単なマシン語を組み、マルチスクリーン方式を採用したのです。1983 年の秋に、ある雑誌社主催のソフトコンテストがあって応募したところ、なんと賞金10万円の特別賞を受けました。もちろん家族は喜んでくれたし、雑誌に自分の名前が掲載されるのはいい気分でした。

ところが、商品として通用するのはディスク管理方式でなければダメだということと、わずか 10 万円で著作権が完全に奪われてしまうという契約書が届くにおよんで、結局は賞金も含めてこの話はなかったことにして、家族に冷笑されながらも著作権を維持できる道を選びました。

あとはディスクドライブを求めることから再スタートです。入るはずの 10 万円が幻と終わったうえに高価なディスクドライブの購入を計らなくてはならないハメとなってしまったわけですが、株式投資で着実な実績をあげていることで、かろうじて妻の了解をとりつけました。初めての 5 インチディスク使用によるプログラムファイルの読み書き時「ゴトゴト」という音とともにあっという間に実行されてしまうその速度にまたしても度肝を抜かれたのはいうまでもありません。今までのテープは一体何だったんだろうかと。

ACT社長さんとの出会い

ディスク方式でのファイル管理への機能拡張はまったくの暗中模索で、ナツメ社の『ディスク・ファイル入門』をそれこそ死に物狂いで勉強しました。パソコン専門雑誌I/Oやマイコン誌にときおり投稿される株式分析関連のプログラムを見逃さずにかたっぱしから解析して参考としました。ただし、考え方は参考にしても手法そのままをそっくり借用するということは一切しないオリジナル開発方式を貫きました。

一応のシステム化が成った段階で、マイコンライフ誌の自作ソフトコーナーに投稿して世の批判を問うてみたところ、数人の方が関心をもって下さり、ひとりよがりに陥っている部分や不備を指摘してくれたり、さらなる機能アップについての貴重なアイディアを提供して下さったりもしました。

鍵足チャートも入れて欲しいとかはいいとして、画面全体に拡張した株価チャートがあればよいがとか、私の意図する総合的な一画面データ解析方式という基本コンセプトをくつがえすような要望も頻発しました。私はこれらの要望、警告のすべてをクリアすることが自分の使命だと考えて真剣に課題と取り組みました。そして、解決したものは速やかにフィードバックするように努めました。新値３本足チャートのアルゴリズム設定がなかなかうまくいかず、２か月間もああでもない、こうでもないと苦しみぬき、やっと独自の方式が生み出せて「ヤッター！」と叫んだこともあります。

種々の機能アップを経て二度目のマイコンライフ投稿を果たしたときに、（有）ACT社の飯田社長さんの目にとまり、はるばる愛知一宮市から高砂の地まで足を運んで下さった熱意と人柄に感じ入るところがあって、本格的な商品化への道を進むこととなり「株式投資の最新兵器」Ver 1.0 を市場に出しました。定価は私の希望でサラリーマンでも手が出せる価格設定とし、機能だけは市販ソフトのどこのものにも負けないものを、という精神を込めました。

あとで、株式投資のノウハウについてふれますが、株式投資で儲けるための情報はそれほど多くを必要とはしません。私のシステムでは、儲けるための必要十分なデータ解析が一画面で総合的にできることをセールスポイントとしています。

鋭い指摘のモニター情報が機能アップ、拡充に大きく寄与

飯田社長さんは実に寛大な人物でして、占有契約しているソフトにあっては通常なら許されることのない、私個人で扱うモニター方式を認めてくれています。このことが実は、私のシステムをどんどん機能アップできることにつながっています。そして、その重要なモニターを機能して下さっているのがPCユーザーズ連盟会員の皆様なのです。さすがにパソコンの達人が多くて、私のもとに継続的に鋭い指摘が送られてきます。

先にもふれたとおり、私はこれらのすべてに対応します。悩ましいのはまったく正反対の意見が寄せられたときですが、本来の目的である「儲けるために何が必要か」という原点にもどって判断します。スポーツの世界でも、自然科学の世界でも「基本に帰れ」が鉄 則です。私自身が実際の株式投資に、日々のデータ管理に最も便利なように、皆様の意見・ 要望を反映させて適正な機能拡張に取り組みます。（有）ACT社でも数人の担当者がバグは一つも許さないという姿勢で、通常ありえないキー操作まで含めて徹底的に機能チェックを繰り返します。

Oh!16 誌（Nov.1984, p.123）に大熊氏によるアイ企画 「株価チャート総合診断システム」 の試用レポートが出ていますが、私が店頭でデモを見たかぎりでは分からなかった詳細を知ることができました。このレポートからは、このソフトが利用する立場で使い勝手がいいようには仕上がっていないことがうかがわれます。おそらく、実際に日々株価データを管理している人がソフト開発を担当していないせいでしょう。この点についてはあとでもふれます。

株式分析ソフトの一番のキーは、データの入力更新が易しい操作で、どんなミス入力も受け付けない方式で効率よくできることです。このデータ管理のやりやすさが株式分析ソフトの生命だと思います。

私は自分自身が毎日データ管理をしていくなかで、最も使い勝手がいい方式を選んできました。多くのモニターの方の意見も十分に反映させました。こうして、真にかゆいところに手が届く、きめこまかな気配りのあるシステムができあがってきているわけです。やがて改訂版 Ver 2.0 をリリースしましたが、PCユーザーズ連盟会員のモニターの皆様は、私のシステムの最新の全容を知り尽くしていたことになります。

ここで、若いパソコンオーナーの皆さんがまちがいなく元気が出るきわめつけですが、これまでに述べてきた株式投資システムの開発をスタートさせたときの私が、実に40 歳の大台にのってからだったということ、そして最も機能拡張を進展できたのがまさしく厄年の最中だったということです。もちろん厄年という考え方が長い歴史から出た生活の知恵であるとは承知していますが、厄払いなどというばかげた迷信はどこ吹く風と流して頑張り続けました。1987 年には 「成長株」 という名称で、日本経済新聞社主催の当時すでに市販されていた高額ソフトのすべてのエントリーができた株式分析ソフトコンテストで、20-30 万もする市販ソフトをおしのけたトップ優秀賞 3 点のひとつに選ばれました。MS-DOS からWindows 時代へと大転換したことへの対応としては58 歳でDOS 版から Windows 対応版へという一大改造に着手して約3か月で実現しました。サラリーマン業務で全国をまたにかけて飛び回らなくてはならない状況下、空港での待ち時間とか、通勤電車で座れた場合には即座にノートパソコンを駆使し、立ち続けの際には専用のメモ帳に残る課題群とその対応策、あるいは改造アイディアなどを次々と書きとどめ、自宅でようやく集中推敲整理するという日々を経て目的を達成したのです。

さて、パソコンを使っての株式投資の最大のメリットは「楽しみながら利益が得られる」ということです。私のモニターをして下さっている方も次々とマシンのグレイドアップを果たしていったようです。

株式投資の実際とノウハウ——100人中の5人になれ！

株は「安値で仕込んで高値で売れば儲かる」。これは誰もがすぐ理解できる鉄則です。問題なのは、どこが安値でどこが高値かという判断です。これが確実に分かるのであれば誰も苦労はしません。投資する人みんなが儲けられます。

ところが、現実には高値がそれとわからないからこそ、そこで買ってくれる人がいます。自分が儲けるとき、その時点でその銘柄を買ってくれる誰かがいるからこそ利益が現実のものとなります。その株がそこから下がるとすれば買ってくれた人は意に反して損をするわけです。このように、己の儲けは必ず誰かの損によって保証されるのが株の世界のカラクリなのです。

私の書籍を通じてのよき指導者である岡部寛之氏は「100人の投資家がいるとしたら、そのうち95人が損をする側で、わずか5人だけが儲けられる」として、5人の中に入りたければしっかり勉強をしなさい、と説いています。

株は一般的に半年－1年ほど先の業績を反映させて動きます。今期、どんなに高収益をあげたとしても来期の予想が減益であれば、もうその銘柄に株価上昇のエネルギーは期待できません。これから先、その銘柄が株価を上昇させるに足るデータの裏づけがあるかどうかが重要で、岡部氏はそこらをしっかり事実ベースでおさえる努力が必要だといっているわけです。

「会社四季報」「日経会社情報」がそうした精度の高い情報データの入手源です。この中で一番わかりやすいのが1株利益の動向でしょう。1株利益が今期から来期にかけて右肩あがりに増大する銘柄を発掘するのです。

他の情報源として株式関係のいわゆる業界紙がありますが、初心者は見ないほうがよいと思います。だいたいにおいてすべての記事がすでに相当の高値圏にきている銘柄を、これからもさらに上昇し続けるようにおおげさに吹聴し、ついつい心理的に買う気にさせるような調子で書かれています。連中の真の意図は、自分たちが安値で仕込んだ株が十分利食える高値圏に到達したころを見計らって、その株がさらに上がりますよ、と過激な大見出しつきの表現で不勉強な投資家の衝動買い心理をあおりたて、自分たちはその間にちゃっかりと売り抜ける算段なのです。先にふれた95人がこうした高値圏の株をつかまされる人たちで、総じて損ばかりするタイプです。

株の売買については、いかなる場合もしっかりしたデータに基づいて自分自身が決断しなくてはいけません。パソコンを活用すれば、売買タイミング決定のためのデータ解析がきわめて効率よく、かつ高い精度で実施できます。

いろんな売買指標の細かい約束ごとは参考文献にゆずりますが、少なくとも2020年現在では、Prime、Standard、Growth、名証銘柄（成長株2020ではGrowthに含めて管理）のおよそ4,000銘柄の日々の変動データすべてがインターネットを経由して1分もかからない所要時間でダウンロードできます。最も安価で安定した供給先として、年間15,840円のデータ利用会員登録をすれば1998年まで遡った日足が自由にダウンロードできるData-Get社(http://www.data-get.com/)というのがあります。有償だけあって信用データもサポートされています。

これらの日足データさえ準備できればあとはコンピュータが使用する分析ソフトのプログラム技術に対応した多種多様な解析グラフを作成表示してくれ

ます。高価なソフトほど画面全体、長期間の株価チャート表示にこだわっていますが、私が実際に儲けたケースでそのような長期間の解析を必要としたためしがありません。最近の「会社四季報」CD－ROM版には株価分析ソフトがバンドルされていて、やはりインターネット経由でダウンロードできる安価ではない（年間¥32,235）東洋経済新報社の株価データをもとにいろんな分析チャートを描画してくれますが、何とそれらチャート類の多くが独立した単一描画で、私の「成長株」システムで提供する一画面総合分析というコンセプトからはあまりにもかけ離れています。ユーザーはそれら一つひとつのチャートを確認したい場合にそのつど画面を切り替える不便を強いられることになります。個々のチャート表示は大きく描画できて確かに見た目に画面はきれいですが、それらをどう活用すべきか、真に必要なものが何であるのかが完全に忘れられています。例えば、逆ウォッチ曲線が右上方向へと切返していれば、これから株価が上昇へと反転することが期待できますが、全体の株価の位置づけが果たして買い出動するのに適正かどうかはロウソク足チャートや移動平均線の動向など総合的な判断が不可欠です。逆ウォッチ曲線グラフだけを画面いっぱいに描いてなんとも思わないソフト開発者は、ただプログラミングの成果を一つひとつ楽しんでいるだけと考えるよりほかありません。

「成長株」システムの機能と改訂裏話を紹介する

私は当初から、株式分析ソフトの開発コンセプトとして、株価の動向を予測するための諸指標を一画面ですべて確認できることを掲げました。こうした一画面総合分析という考え方がいかに斬新なものだったかは、イラスト化された私のソフトの分析画面がNEC発行のアプリケーション情報誌1985.5版表紙デザイン（丸印部）に採用された事実に見ることができます。この「総合評価」という発想がマイコン誌コンテストでの特別賞、あるいは日経新聞主催ソフトコンテストにおけるトップ優秀賞（３点の一つ）という高い評価を得た大きな要因だったと考えます。まずは自分自身の株式管理に役立つソフトをめざし、いつとはなし　に他の人の株式投資をも支援できるシステム開発へと発展していきました。

私の株式投資支援システム「成長株」では、日足管理を中心に持株の絶好の売り場を逃さないよ う にきめ細かく分析します。株価の変動をロウソク足という チャートで解析する手法は、米相場の動向把握を目的として日本人が考案した世界に誇れるテクニカルツールですが、これにアメリカのグランヴィルが開発した移動平均線という解析手法（例えば岡三経済研究所刊の『実践・株式チャート入門』参照）を加味すると分析の精度が一段と向上します。その移動平均線も１本だけでなく、移動平均期間を短期と長期２本の組み合わせで観察すれば、短期線が長期線と下から上へと交差して上抜ける場面をゴールデンクロス、逆の交差をデッドクロスとよんで、前者が上昇へのはずみがついた場面、後者が下降トレンドへの転換場面だと分析でき、株価の今後の動きがかなりの高い確率で予測できます。現在の「成長株2020」システムでは短期、中期、長期３本の移動平均線を採用していて、短期は一週間の立合い日数、中期はその倍、長期は最も採用度の高い25日という期間設定を標準に運用していますが、もちろんそれらの期間はユーザー側で自由に変更できます。このあたりの詳しい解析方法は参考文献にあげた保井氏の著書などで勉強できます。

「会社四季報」や「日経会社情報」の発刊日に、あるいはそれより早い日経新聞中記載の決算データ記事によって、ある銘柄が有望だとわかると多くの投資家が同様に注目し、その結果は出来高の増加という形であらわれます。株価が急な上昇をするとき、この出来高も必ずふくらみます。あとは強気な投資家と悲観論者とのかけひきで、信用取組ができる銘柄ならその売買もからんで、予想を超えた動きも出てきます。こうした出来高も含めた強弱度を指数化するのには株価の変動＋出来高変動、すなわち株価と出来高の加重移動平均という概念を使います。「成長株2020」では出来高棒グラフの上に２本の加重移動平均線を描いて短期線と長期線との絡み具合を観察し、上で述べた株価移動平均線と同様にゴールデンクロス、デッドクロスの分析ができます。

「成長株2020」では、日足の解析に限った方が高い確率で的中するようですが、対象とする銘柄の底値を「ここが底値です」と緑の丸印でズバリ指摘する手法も搭載しています。この分析手法はMS-DOS版当時のユーザー様から、その底値指数の算出ノウハウとともに提供を受けて「成長株」にぜひとも組み込んで欲しいとのご依頼に応えてプログラミングし追加搭載した機能です。この方からは「五険法チャート」という概念のグラフ化依頼もあって、一時その方の要望どおりのチャート表記を採用しましたが、期待する分析が鍵足チャートで完全に置き換えられることが分かり、今はマニュアルに「五険法チャート」という呼称も残していませんが「成長株 2020」は、全国多くのユーザー様からのご依頼・要望事項を組み込んで、文字通りソフトそのものも成長し続けて現在に至っています。

ソフト開発に欠かせない「改訂例」をあげると、データの修正モードに株価をリスト形式で一覧表示させて確認できる画面がありますが、その株価レコードは最新データが一番上にくる順番となっています。

実は私が開発した当初は古い方からの順番としていましたが、実際に見たいのは新しいデータが優先するのだ、と使ってみて初めて分かるのです。同じことは手入力による株価データの順序にも当てはまりました。何も考えないソフト開発プログラミング作業だと For～Next というデータの処理部分で単純に 1 から最後までという順序を採用して少しも疑問を感じません。プログラマーがユーザーではない場合、こうした「本当に実用的か」という視点でのギャップが生まれてしまうのです。幸い「成長株」についていえば、その最ヘビーユーザーが開発担当の私自身であり、日々使い込んでいる中でぶつかる不都合や不具合はどんどん改訂・修正していけばいいのです。そのことが「かゆいところに手が届く」稀有なソフトへと進化し続けている最大のポイントです。

新聞や雑誌に思わぬ有用な株式分析のテクニカルツールが紹介されることがあります。それらツールの原理原則がくわしく紹介されていると私のソフト進化意欲がだまっていません。ただちに「成長株」への組込みを考えます。60 歳の大台にのった以降もその気概は失せていなく、2005 年以降も Larry Williams %R、Bollinger Bands、Volatility などのグラフ化を新たに開発して搭載しました。

新しいツールを追加するとすぐにもモニターユーザーの方たちにいち早く提供してあげたく、ときに十分な機能チェックを完遂しないまま改訂版を提供してしまいます。そんなときに限って、自分では毎日のように使い込んでいるのにユーザー様でしか発見できないバグが見つかります。幸いそのフィードバックはインターネットメールの発達で、ときには時分単位で知らせてもらえます。当方も素早く対処法を検討し、再び差し替えの改訂版をメール配信して応えます。ソフト内容が進化すればマニュアルもそれに合わせて改訂しなくてはなりません。MS-DOS バージョンの頃にはた製本化にこだわって 30-40 万円という印刷のための初期投資が必要でしたが、頻度高い改訂にそうした製本スタイルはとてもなじみません。今では Word 文書を PDF ファイルへと圧縮すれば何とかインターネット経由でユーザー様に届けられる状況となっていますが、画面画像を貼り付けたマニュアルはすでに Word 文書で約 9MB、純正の Adobe Acrobat 利用の PDF ファイルで 8MB 強の容量となってきました。

この過程で思わぬ事象を経験しました。純正 Acrobat 7 で PDF 化をした場合 10 分以上もかかって作成されたファイルは Word 文書で 51 ページなのになぜか 50 ページとなるのです。中をのぞいて唖然、後半部の画像があちこちでその位置がぐちゃぐちゃに乱れてしまっていたのです。発売元に電話して指示されたどの方法でも全く改善しなく、しまいには「お客様のハードウエア環境に依存した問題のようで対応しかねます」とのつれない対応。やむなくインターネット検索でフリーウエアの PDF 作成ソフトを求めて、本当に避けがたいことなのかを検証しました。するとどうでしょう。たまたま最初に見つかった PrimoPDF というツールは英語のコマンドしか出ないものの、何と 2 分もかからないスピードでちゃんと 51 ページ分の PDF ファイルが作成され、画像の乱れが全くないばかりか驚くことにそのファイルサイズはわずか 5.4MB だったのです。高機能をうたい文句にばか高い定価の Acrobat ソフトですがとんでもない不良ソフトだったことが証明されたできごとです。

もうパソコンなしの株式投資はありえない

インターネット利用のリアルタイムトレードが可能となった現在で、このサブタイトルは陳腐化してしまいましたが、初稿で私はこう述べました。

株式投資管理システムの開発に取り組んできて思うことが二つあります。一つは、BASIC に限ったとしても株式解析分野には実に多彩な技術の凝縮があるということ。ファイル管理、グラフィック、そしてデータクラッシュに対応すべくディスク解析法も マスターできました。何とかしたいと必死になるから本当の技術として身につくわけです。今ひとつは、実に長い期間と労力を費やした見返りとして（ソフト販売によって）得られる実収入相当額が、わずかの期間の持株の上昇によっていとも簡単に得られてしまうという事実です。

だからこそ株は面白くてやめられないし、（第二点の利益確保を確実なものとして継続維 持してゆくためにも）バグの絶滅と、かゆいところに手の届く気配りソフトへのさらなる機能アップをめざして株式投資支援ソフト「成長株」のメンテナンスもやめられません。（June 6, 2005 記）

● 参考文献

『会社四季報で儲ける法』 岡部寛之 （東洋経済新報社,絶版）
『不況期に儲ける相場術』 岡部寛之 （サンケイ出版,1980）
『株は芸術』 嶋田昭孝 （光文社,1981）
『新版 株式罫線の見方使い方』 木佐森吉太郎 （東洋経済,1982）
『右肩上がり「着実株」の仕込み方儲け方』保井正 （アスカ,1985）
『実践：株式チャート入門』岡三経済研究所（ダイヤモンド社,1987）
『株式チャート徹底活用集』 吉見俊彦 （山海堂,1988）
『株価チャートの読み方基本』小山哲 （すばる舎,2003）
『個人投資家のための信用取引の儲け方』 石井経済研究所 （アスカ,2004）